

美術科教育学会通信 NO.38

2000年9月25日発行

学会事務局 〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学教育学部 美術教育学研究室
TEL: 0734-57-7359,7358 (長谷川・永守研直通) FAX: 0734-57-7509,7508 (同)
通信担当 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学 TEL&FAX: 0742-27-9223 (宇田研直通)

「リサーチ・フォーラム 2000」報告

コーディネーター
山木朝彦(鳴門教育大学)

第二回美術科教育学会課題研究会「リサーチ・フォーラム2000」が、8月25日(金曜日)に、東京都中央区ぺんてる本社ビル14階会議室にて開催された。

今回は、テーマとして、「美術批評と鑑賞の問題 『批評』の意味と鑑賞教育の実践」を掲げ、美術館の学芸員二名に私を加えた三名の発表者と総括を行う二人の研究者を中心に研究会を行うことを構想した。前回のリサーチ・フォーラム'99(テーマ「美術教育における"ディシプリン(規範性)"」)に比較すると、いかにもシンプルな構成ではあるが、それぞれのパートの充実期待した布陣である。また、午後の質疑応答とディスカッションにも十分な時間を用意することにした。

研究発表と総括の内容、およびディスカッションの詳細については、学会誌第22号(2001年3月発行予定)に発表の場をお借りすることとし、ここでは当日の流れに沿って、研究会の概要をお伝えすることとする。

1. 当日の流れ(午前10時 午後5時)

- ・代表理事挨拶 花篤 實
- ・コーディネーターによる趣旨説明 山木朝彦

- ・事務局担当者から進行等の案内 上山 浩
- ・研究発表1 「批評活動と教育普及活動 美術史・美術批評・美術教育」菅 章
- ・研究発表2 「奇形の近代主義と岡本太郎という現象」仲野泰生
- ・研究発表3 「戦後美術批評の位相と美術教育の関係」山木朝彦
- ・中間総括 永守基樹
- ・討議(質疑応答を含むディスカッション)
司会 上山 浩
- ・最終総括 橋本泰幸

2. 上記の発表内容のあらまし

花篤代表理事の挨拶の内容は、1970年代から発展を遂げたアメリカの美術教育カリキュラムの開発と対比する形で、日本の美術教育の現状を整理し、前回のリサーチ・フォーラムにて取り上げられたディシプリンとのかかわりで「批評」の問題が整理されることを期待するというものであった。

コーディネーターの山木は、前回のディシプリンをめぐる研究・討議を通して浮かび上がった、いくつかの観点到繋がるテーマとして、「批評」の問題を取り上げ、人選を行った経緯を述べた。すなわち、美術史を参照することによって、論理性をもった教育内容を追究しようとする視点と、現代のカリキュラム立案のためには、児童の主體的な創造的活動を中心に据える必要があるとする視点を媒介するために、「批評」の問題を考えてみてはどうかという提案である。「批評」は、言語を媒介にして作品を語る論理性と主體的な批評対象の選択や主観に基づく判断を併せ持った活動であり、そこに表現者の意識と鑑賞者の思考を繋ぐ鍵があるのではないかと期待したわ



左から上山(司会)、山木、菅、仲野の各氏)

けである。

研究発表1の発表者、菅 章(大分市美術館)は、公立高校でデザインを教えた経験を持つ学芸員であり、現在は生涯学習の観点から美術館の企画と教育普及に努めている。美術館は子どもの遊び場ではないという、いささか挑発的な言辞から始めた菅氏は、大人の文化が崩壊しては、教育=学習活動が成立しないこと、美術の価値を探し出す行為が美術館で行われることを期待すると述べた。この観点からすると美術の教育と美術による教育には本質的な差異があるとは思えない。美術そのものを媒体にして豊かな教育が行われる場として、美術館の教育機能を考えていると述べた。

続いて、自ら企画した日本のネオ・ダダ(オルガナイザーズ)の展覧会では、美術批評のなかで表れる「反芸術」という言葉をアーティストたち(吉村益信、篠原有司男、赤瀬川原平、荒川修作)も共有していたこと。彼らの芸術と反芸術をめぐる思考は、アメリカのネオ・ダダという運動を意識し、相対化する文化的な運動であったこと、場合によっては彼らの作品そのものが日本の美術概念の間

い直しという批評活動であったことなどがスライドによる作品解説を交えて論じられた。教師もまた「なぜ、これがアートなのか」という問いを発する必要があるだろうと結論づけた。会場からは、子どものリアリティーと現代美術の重要性を重層的に捉えることを構想すべきではないかなどの意見が出た。(応答は省略)

研究発表2の仲野泰生氏(川崎市岡本太郎美術館)は、日本における「美術」概念が明治以降輸入されたものであり、岡倉天心によって、はじめて日本の「美術」の歴史的系譜が体系化されたという経緯を踏まえて、美術教育を問い直すべきだと主張した。「批評」行為もまた、同時代の美術に関わりながらも、歴史的な時間軸の中で、「美術とは何か」を考える方法であると規定し



会場風景(発言する長谷川氏)



会場風景

た。批評とはその意味で時間(歴史)と場(社会)から、文化的な脈路のなかの「美術」を考えることである。

このように整理した上で、岡本太郎は、日本の近代のありようを批判する表現者であり、その意味で真の批評家であったということ仲野氏はビデオを用いて語った。岡本太郎美術館の企画のワークショップが広義の批評活動であることについても述べた。これに対して、会場からは岡本太郎の通俗性の意義を捉え直すことで、美術教育における批評の重要性がわかるのではないかという意見があった。

研究発表3は、コーディネータの山木が、美術と美術批評と美術教育という三者の関係について、戦後のもの派、久保貞次郎、滝口修造とリードなどいくつかの事例に沿って論じた。ここでの問題意識は、なぜ、美術教育と美術批評は乖離したものとなったのか、という点に集約される。現代日本の美術教育研究と実践の中で、同時代の美術概念を問い続ける美術批評を参照せずに鑑賞用の作品を羅列することがあるとすれば、あまりに恣意的にすぎるだろう。

この観点から、教師教育の過程で、様々な美術批評のアプローチを学ぶことが提案された。会場からは、ポストモダンの状況における批評の観点についての提案などがあつた。



永守氏による中間総括

中間総括の永守基樹氏は、発表者の三人に共通しているのは、美術のアヴァンギャルドをめぐる問いかけではないか、として、

フォーマリズムとアヴァンギャルド精神から現代の状況を整理した。また、「批評」という観点が現代のカリキュラム立案における構造化に有益なのではないかと語った。

討議では、世代間の言葉のギャップの問題、グリーンバーグのフォーマリズム批評をめぐる議論、日本の近代美術を取り上げて批評を論じる意味、美術を語る言葉を教える功罪、美術批評の多様なアプローチを選択するメタ批評の可能性、そして、美術館での鑑賞やワークショップと子どもの批評の精神など多岐にわたつた。この討論のプロセスを通して、「批評」というテーマが持つダイナミックな力が確認されるとともに、「批評」を美術教育に導入する際の方法論の多様性が浮上した。

最終総括の橋本泰幸氏は、日本の学校美術教育の歴史は図画教育・手工教育の時代から現代まで、様々な紆余曲折を経ながらも造形行為の教育的価値を追究することに費やされた歴史であり、同時代の美術運動そのものとの生々しい接触を図つたことはほとんどなかったが、今回、「批評」を取り上げることによって、美術教師と学習者の児童・生徒が、美術の運動に参加し、美術状況そのものを変えるための枠組みを提示したと思うと語った。

以上、8月25日のリサーチ・フォーラムについて、速報として、できるだけ客観的にまとめしてみた。なお、当日の参加者数は、58名、会場がいっぱいとなる状態で盛況であつた。



会場風景(発言する堀氏。手前は最終総括を担当した橋本氏)

「第3回リサーチ・フォーラム」プラン公募のお知らせ

学会事務局

本学会では、一昨年度までの通称「出前シンポ」(全20回)に代わる新企画として、昨年、今年と「リサーチ・フォーラム - 美術科教育学会課題研究会」を実施いたしました。このリサーチ・フォーラムの<位置づけ、意味・意義・目的>は、以下の三つに集約されます。(後ろに、学会誌より全文を転載いたしましたので、御覧下さい。)

1. 美術教育学の学的研究課題の提示の場
2. 学会内部の共通基盤の形成の場
3. 社会への発信の拠点

大きな教育改革や社会的激動の波間にある今、斯界が直面している課題を明確に設定し、その課題についての幾つかの論の提示(口頭発表)及び質疑応答、全体討議という形態をとって追究いたします。昨年、今年の課題は、以下のとおりです。

- 第1回課題 1999年8月27日実施
美術教育における“ディシプリン(規範性)” - 「美術の論理」と「子どもの論理」
- 第2回課題 2000年8月25日実施
美術批評と鑑賞の問題 「批評」の意味と鑑賞教育の実践

この2回の成果と課題を引き継ぎ、来年度に第3回リサーチ・フォーラムを同時期・場所(8月末、東京ペਂてるビル会議室)で開催したいと考えております。そこで、次回リサーチ・フォーラムにつきまして、学会員の皆様より、広くプランやご意見をお聞きしたいと思います。個人、グループ、どちらでも構いません。

御意見の内容としては、過去2回の反省や次回への提案、さらには、次回に向けての具体的なテーマ設定等が考えられます。また**テーマに伴ってのコーディネーターへの立候補**も受け付けます。忌憚のない御意見をお待

ちしております。皆様の御意見やプランは、事務局、総務会にて慎重に検討して、第3回に活かしていきたいと思っております。

- ・御意見、コーディネーターへの立候補のメ切は、本年10月末といたします。
- ・書式は任意ですが、連絡先は必ず正確に記入しておいて下さい。
- ・宛先は下記の長谷川までお願いいたします。郵便または電子メールにて受け付けます。トラブルを避けるため、Faxにつきましてはご遠慮願います。

【送付先・問合せ先】

〒640-8510 和歌山市栄谷930

和歌山大学教育学部美術科教育研究室
長谷川哲哉

E-mail:tetsuya@center.wakayama-u.ac.jp

「リサーチ・フォーラム - 美術科教育学会課題研究会」学会としての位置づけ、意味・意義・目的(学会誌第21号より)

学会事務局 永守基樹

1. 美術教育学の学的課題の呈示の場として
美術教育学は、大きな教育改革の波や社会的激動にさらされている美術教育の現場に立脚している。そこでは価値の転換が求められているし、過去の美術教育学の総括と新たなビジョンの呈示が切実に求められている。そして他方では広大な学的領野と方法を内包する美術教育学は、独自の学的世界を確立することや、共通の問題意識を形成することについての困難を抱えている。

多様で変貌を続ける美術教育の世界において、ひとつのディシプリンを貫徹することは不可能であろう。むしろ教育の学としての実践性という特質を生かして、アクチュアルでプロブレマティックな つまり今日の教育や

社会の現実ときり結び、次代への問いを投げかける 問題群を示し続けることこそが美術教育学の形成と発展のための基礎作業ではないだろうか。その問題群への諸ベクトルの交差として美術教育学は可視的なものとして形成されると考える。

それゆえ、「リサーチ・フォーラム - 美術科教育学会課題研究会」はテーマ(斯界が直面している課題)を設定し、そのテーマについての必要十分なくつかの論の呈示と討議という形態をとる。

2. 学会内部の共通基盤の形成の場として

美術教育学は実践的教育に関わる学であり、きわめて広範で複合的な学である。それは古典的な学(ヴィッセンシャフト)とは異なり、美的な感性に関わる臨床性とCS(カルチュラル・スタディーズ)にも似た横断性を持つ。しかし私たちは自らの言説が美術教育の実践から直に生み出されるものと錯覚することは許されないだろう。教育の実践と学的言説との関係と距離を慎重に形成しながら、両者を活性化していくことが求められているのである。

教育の実践や現象について、それを語る「装置としての美術教育学」は、「科学」「記述」「批評」「哲学」...等の多彩な形態を持つ。それらの集合体である学会の役割は、それらの言説や研究者を結びつける「枠組み」を示すことにあるだろう。リサーチ・フォーラムにおける「問題群」とは、その枠組みの多様な表れであり、同時に枠組みを形成する結節点なのである。

その「枠組み」は柔らかなものであるべきだが、構造体としての強さをも必要とする。そしてその強さは学的言説の質によってのみ形成される。学的言説のレベルこそが、あらゆる目論見に先だって問われるべきなのである。リサーチ・フォーラムはいわば「テーマを設定し、選抜された口頭発表」であり、ジャーナリスティックな私見の開陳ではない。当該テーマについての美術教育学の方法と到達点を会員・参加者に呈示することによって、テーマに関する共有の地平を形成

し、創造的な論議展開の場とすることが必要であろう。そのことは副次的に本学会における研究発表のあるべき姿を後進に呈示することにもつながる。

3. 社会への発信の拠点として

いうまでもなく「学会」は社会的な組織・機能体である。教育の実践の場に立脚する美術教育学は、常に「学」を社会に対して還元していく責務を負う。還元する相手はいわば「消費者」とも言えるが、同時に子ども・教育実践の場・社会等は美術教育学の源泉でもある。このフィードバックの活動について、私たちは今まで以上に自覚と努力を求められることだろう。

美術科教育学会は、しかし、昨年度までに20回もの「出前シンポ」を全国各地で開催し、特に地域と地域の美術教育関係者に対しての働きかけを行ってきた実績と経緯がある。リサーチ・フォーラムはこれを踏まえて、学会内部の「絆」を形成するとともに、同時に社会一般や他の学的分野に対するアプローチに重点を移し、「絆」を広げていく試みであると言えるだろう。そのために、諸メディアやジャーナリズムへの広報や、他学会との連携を積極的に進める必要がある。

2000年度 夏季役員会について

事務局代表 長谷川 哲哉

恒例の夏季役員会が去る8月24日にぺんてる本社会議室にて開催されましたので、ここに議題について簡単な報告を致します。

議題

1. 新入会員の承認について
全員が承認されました。
2. 監事の欠員補充について
福本謹一氏が新監事となりました。

3. 次期役員選挙の方式・日程及び立会人の指名について

選挙管理委員長の浜本理事より日程(11月上旬投票用紙発送・12月中旬開票)と従前の方式踏襲の提案がなされ承認されました。また開票等の立会人として宮坂理事が選ばれました。

4. 他学会との合併問題について

花篤代表理事より、今春生じた他学会との合併・統合問題の解消経過が説明されました。

5. 会計の健全化の対策について

長谷川事務局代表より、今年度の文部省出版助成金の不採択に伴う学会会計の健全化の必要とその対策について説明がなされた後、役員より種々の意見が出されました。実行可能な対策法の決定については今後の課題となりました。

6. 会費納入方法の口座自動引き落とし化について

会計担当の岩崎理事より標記の原案が出され承認されました。来年度より、自動引き落としすることに決定しました。後日、学会事務センターより別便で、口座自動引き落としに関する書類が送付されますので、御確認の上、手続き下さい。

7. 一研究部会の廃止について

藤江理事よりアミューズ・ビジョン研究部会の廃止の申し出がなされ、承認されました。

新たな研究部会の募集については、本号の藤江理事の記事を参照してください。

8. 学会大会について

- ・先回の兵庫大会の成果報告が福本新監事よりなされました。
- ・次回(2001 / 3)筑波大会の準備状況が岡崎理事より報告されました。
- ・次々回(2002 / 3)の開催大学については目下未決定の事情が花篤代表理事より説明され了承されました。

9. 学会の組織・運営方法の改革の必要性について

大会開催大学や事務局担当のローテーション・ルール、役員組織の改革、学会名の改称、等々について花篤代表理事の構想が説明され

た後、多様な意見や要望が出され活発な論議がなされました。いずれについても決議はなされず、今後の検討課題となりました。

新入会員紹介・住所変更

永守基樹(事務局庶務担当)

下記の方の入会が総務会(7月8日,大阪)及び役員会(8月24日,東京)にて承認されましたので、ご紹介いたします。

中村 和世(米国イリノイ大学リサーチフェロー)

森 弥生(徳島県立国府養護学校)

前芝 武史(筑波大学大学院)

森田 耕太郎(筑波大学大学院)

塚田 美紀(東京大学博士課程)

仲野 泰生(川崎市岡本太郎美術館)

坂本 和生(徳島市立城東中学校・鳴門教育大学大学院)

磯部 洋司(愛知・日進市立相野山小学校)

福井 晴子(岡山大学大学院)

藤岡 孝充(東京・東洋英和女学院)

木村 典之(大分大学附属中学校)

中尾 貴子(兵庫教育大学大学院)

高橋 文子(水戸市立千波小学校・茨城大学大学院)

赤木 恭子(横浜国立大学大学院)

橋本 忠和(兵庫・一宮町立三方小学校)

伊藤 裕貴(福井県立敦賀高等学校)

鈴木 美樹(福島学院短期大学)

田中 圭一(堺市立三国丘中学校)

初田 隆(兵庫教育大学)

谷山 育(大阪市立文の里中学校夜間学級)

柳川 貴司(神奈川・東海大学)

伊庭 靖二(滋賀・草津市立新堂中学校・兵庫教育大学大学院)

片桐 彩(神奈川・相模原市立大野台中学校)

会員住所等変更のお知らせ

麦 嘉芳 新住所 = 990-2331 山形県山形市飯田西2-2-9-106 山形大医職員宿舍B棟
新聞 伸也 新住所 = 520-0862 草津市東矢倉 3-39-2-244, 新勤務先 = 滋賀大学教育学部
佐野 仁美 新住所 = 417-0071 静岡県富士市国久保 2 丁目 9-3

第23回美術科教育学会 大会のお知らせ

筑波大学芸術学系
岡崎昭夫・直江俊雄

来年度に開催予定の大会の日程が8月24日の役員会において承認されましたので、お知らせいたします。

- ・開催日時
2001年3月26日(月)・27日(火)
- ・会場
筑波大学体育芸術専門学群棟
- ・大会第一日 26日
11時30分 受付開始
12時15～45分 開会行事
13時～16時25分
研究発表A(30分プログラム)最大48件
16時45分～17時45分
特別行事(バウハウス再現授業)
18時～20時
懇親会(大学会館)

- ・大会第二日 27日
9時～11時15分
研究発表B(45分プログラム)最大21件
12時30分～2時25分
研究発表C(60分プログラム)最大6件
14時45分～15時45分
特別行事2(感性評価プログラムの実演)
16時～17時 学会総会・閉会行事

今回の学会は、日程を短縮し、特別な大会テーマを掲げることは避けて、研究発表を主体にして行うことになりました。口頭発表の時間は、30分、45分、60分の3種類を設けましたので、ご研究の成果をご考慮の上、持ち時間を選択して下さい。発表をご希望の方は同封の申込書に記載の手順にそって手続きをお願いいたします。

また特別行事としては、宇都宮美術館の岡本氏らによるバウハウスの再現授業、及び本学の感性評価プロジェクトのスタッフによる美術鑑賞ロボット実演、の二つを用意いたしましたので、ご参加をお待ちいたしております。

なお開設予定の大会事務局ホームページ(<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~artedu/>)には大会直前まで研究発表の会場・時間・題目などの一覧を掲示いたしますので、ご参照下さい。



筑波学園都市(筑波大学HPより転載)

研究部会より

研究部会の活動内容の紹介、シンポジウムの案内、新設&会員募集等の情報を掲載します。

「メディア・リテラシー研究部会」設立のご案内

ふじえ みつる〔愛知教育大学〕

8月24日の学会理事会で「アミューズ・ヴィジョン研究部会」が発展的解消の形で部会としての登録を取り消すことが承認されました。部会以前からの研究会としては今まで通り活動を続けますが、登録の取り消しは、美術館教育についての学会での認知も高まり、部会としての一応のけじめをつける意味もあります。

しかし、美術科教育学会で鑑賞教育を研究する部会の必要性は消えていません。そこで新しく鑑賞教育を中心に研究をする部会の設立を提案します。この新部会は、とりあえずは学校や美術館での美術鑑賞教育を中心に研究・情報交換を行うことから出発することになると思いますが、今後は美術作品の鑑賞だけでなく広く視覚芸術、映像等を「見ること・読むこと・作ること・語ること」へと展開していく可能性もあります。表現 vs. 鑑賞という対立図式での鑑賞概念にとらわれないためにも、この部会の名称を「メディア・リテラシー研究部会」としました。この部会の性格付けは今後の活動を通して明らかにされていくことと思います。

以上の趣旨では簡単すぎて判断ができればかもしれませんが、この新部会に入会を希望される会員の方は下記までお知らせ下さい。来年3月の学会理事会で会員数などの資料をつけて登録申請したいと考えています。そこで承認されれば4月から正式の発足とい

うこととなります。部会の代表及び事務局は呼びかけ人である私が、とりあえず担当させていただきます。熱意のある会員の参加を希望します。

記

入会申し込み及び問い合わせ先:

往復ハガキやFAX、メールなどの文書でお願いします。

氏名、所属、職種、住所などの連絡先、電話とかメールなどの連絡方法を明記して以下までお願いします。

ふじえ みつる〔愛知教育大学〕

〒448-8542 刈谷市井ヶ谷町広沢1
愛知教育大学・第4部・美術教育講座
Tel&Fax: 0566-26-2444

E-Mail: mfujie@aecc.aichi-edu.ac.jp

「アート・セラピー研究部会 (仮称)」の設立に向けて、会員募集のお知らせ

花篤實 (代表理事 大阪芸術大学)
阿部寿文 (大阪女子短大)

今日の美術と教育をめぐる状況をふまえ、「アート・セラピー研究部会」(仮称)の設立を模索しています。美術教育学と心理学との連携、ライセンス化への道を探りたいと考えております。まだ、骨子は完全に固まっておりませんが、興味、関心のある方がおられましたら、下記まで御連絡下さい。

〒582-8558 大阪府藤井寺市春日丘3-8-1
大阪女子短大児童教育科 阿部寿文

TEL: 0729-55-0733

FAX: 0729-55-5211

E-Mail: qg8t-ab@asahi-net.or.jp



書評&文献紹介

河合隼雄著『子どもと悪』 (岩波書店, 1997)

栗山裕至 (佐賀大学)

近年何かと教育の問題が叫ばれる中、学校の教師はとかく矢面に立たされ、「もっとがんばれ」「もっと熱意を」と責められ煽られている感がぬぐえない。実際、学校という場所は教師にとって、ますます多忙でせわしないところになっている。

「がんばる」「一所懸命」という姿勢はいかにも日本人好みの健気な姿ではあるが、この善意の姿勢が度を越すと、教師がある意味での視野狭窄状態に陥ってしまうことが懸念される。具体的にいえば、教師の求める子ども像があまりに理想化されてしまい、その「正しい」子ども像と生身の子どもとのズレが生まれてしまう。また、子どもにもがんばりを強要し、自分でも気づかぬうちに、せっかちに教育効果を求めるようになってしまっているのではないか。さらにいえば、「がんばる」「一所懸命」という姿勢そのものが絶対化され、学習させる内容の必然性や発展性の如何がないがしろにされかねない。

ここに御紹介する著作は、驚くほどに読みやすく、しかも戦略的なまでに警句に満ちた教育書である。臨床心理学者である著者河合隼雄は今日の教育について読み解いていく上で、カウンセラーとして実際に接した子どもや親の姿はもちろん、創造的な業績を挙げた人物の生育歴の考察、そして日本人の心性についての鋭角的な分析など、複数の視点から迫っている。子どもの個性や創造性に関わる興味深い体験談や教師に対する示唆的な指摘が、(持ち上げるようで恐縮だが)実にたくさ

んある。

例えば著者は、本書において「悪」について「人間は自分の存続のために、何らかの集団をつくっており、その集団 - 一種の生命あるもの - の否定を悪と感じる」「集団の維持にはある種の規約が必要となり、その規約を破ることが、悪になってくる」と述べる。集団の中に入らず一人でボーっとしている子、自分だけで外遊びをしたがる子や読書に没頭して交友関係が狭い子は、そのことだけで教師から「悪い子」と見なされ、孤独はいけないとかもっと活発にとかいう「熱心な指導」を受けることになる。だが、個性や創造性の発揮は、そうした悪の形をもって顕現するのではと著者は問う。そして、「明るく素直でがんばるよい子」を求めたがる学校の体質は、子どもが本来もっている個性の発露としてのアグレッション(攻撃性)を抑圧・排除しており、それが創造的な芽を摘み取ることになっていると断じる。あるいはまた、泣く・怒るといった強い感情や深い根源悪を体験してこそ人間の心は豊かに成長していくのであるが、日本の教育に見える知性重視と身体性軽視の傾向は、子どもの心を「規格にはめこむ」とも述べている。

造形活動の中に、一人ひとりの子どもによる身体性の開放や既成の秩序の破壊という攻撃性を見て取るならば、造形する行為そのものが、学校という秩序、授業という秩序的な営みの中で、河合のいう悪として働くともとらえられる。造形に内在するこの攻撃性や暴力性と、学校的な秩序とのせめぎ合いの緊張を、昨今のせわしない教師がどれだけ作り出し高められるのか、そしてどこまで耐えられるのか。それとも、「悪い子」が教育的指導の対象になってしまうように、造形活動も本来の牙や毒気を抜かれ、ただ明るく陽気に見えるだけのものにされてしまうのだろうか。

Mail Box

このコーナーでは、会員の方々からの便りを掲載します。学会や美術教育に関するご意見等をお寄せください。

自著紹介

上中良子（大阪薫英女子短期大学）

近年の社会の矛盾の激化と関連した極度の教育困難状況にあって、教育現場では子どもたちも教師もこれ以上ないほど追い詰められています。あり得ない状況が子どもたちを取り巻き、息苦しさが増幅している現実において、美術教育がどんな役割を果たすのかの緊急かつ具体的な提起が求められています。そういう提起の一つとしての著書二種（単著二冊・共著一冊）を紹介させていただきます。



著書

「こどもが『生きる力としての主体的表現力』をどう身につけ、活き活きした日常生活と集団作りをどうものにしていくのか？」

「2002年からの『総合的な学習の時間』施行を前にして、真にこどもの生きる力となる総合学習の方法と理念を美術教育との関わりでどう展開すればいいのか？」

をまとめたものです。

是非一読していただき、ご批判をいただければと思います。

著書

『表現を生かした総合学習の展開』（上中良子・神吉脩・竹井史・山田康彦編著）明治図書出版刊，2000年8月初版

新学習指導要領において、その実施内容に注目が集まっているのが「総合的な学習の時間」です。主体的で内実豊かな総合学習を展開していく上で、表現活動がとりわけ重要な意味を持つとの考えから編集された本書は、「...ささやかな第一歩として表現活動と総合学習との関連に焦点を絞り、その理論的な側面を整理し、同じに実践事例をあげながらできるだけわかりやすく具体的に解説しよう」（「はじめに」より）としています。Q & A形式による考察と実践例の二つの側面から、表現を生かした総合学習をとらえる構成です。

著書

《総合学習に生かす美術教育1巻》『「絵綴り方」を生かした学級づくり 小学校低学年』（上中良子著）明治図書出版刊，B5判90頁，1999年5月初版

《総合学習に生かす美術教育2巻》『「絵綴り方・綴り方」を生かした学級づくり 小学校中・高学年』（上中良子著）明治図書出版刊，B5判110頁，1999年5月初版

大正・昭和を通じた我が国の優れた教育方法論の最大の一つといっても良い「生活綴り方教育」。その“生活綴り方教育論”から学ぶ

教育視点と教育方法論の本質を、美術表現に意識的に取り入れた教育実践のまとめである。こどもにとって、「語る」ことと「描く」ことは最も日常的であり、自然な営みといえる。つまり彼らにとってその方法と理念は、必然そのものなのである。「絵」と「ことば」は、単に相互作用を持つというだけではなく、彼らにとっては、むしろ一体で成り立つ素朴かつ本質的な意味を持つ表現方法の一つと考えられる。日常の生活における素直な思いを綴るように描く、描くように綴ることで、心が解放され、表現の質も高まっていく営みである。その活動を通してこども集団が育っていくさまを具体的にリアルに示した。

二巻構成である。低学年編は、幼児期の成熟期にある彼らの心をどう引き出すのか、小学校入門期の教育のありようと絡めた。中・高学年編は、低学年で育つ土台の上に何をどう積み上げるのかを、発達課題と集団作りと表現活動が一体となって展開されていく姿を示した。

以下に、教育系新聞で紹介された二記事を転載する。

【全私学新聞・掲載記事(1999・7・3)から】

小学校低学年の「総合的な学習の時間」に、生活の一コマを絵と文章で表現する「絵綴り

方」を活用しようとする教師向けに編集された美術教育読本。「総合学習に生かす美術教育」シリーズとして刊行され、第二巻は、中・高学年対象の「絵綴り方・綴り方」編。

実例として、こどもたちの作品が多数掲載されている。日常の会話や友達とケンカしたこと、飼っている動物が死んでしまったことなど、着眼点や表現の一つひとつに素直さがうかがえて、読みながら思わずほほ笑んでしまうものばかり。

京都府、大阪府で小学校教諭を経験し、現在は大阪薫英女子短期大学に勤める著者は「こどもたちとの日々を大いに楽しみ、彼らの素晴らしさを感じられるのは学級担任だ」と、後進にエールを送る。

「絵綴り方」の指導を通じて、児童が日々の生活の中で感じたことを先生やクラスメートに教えようと一生懸命になる姿を見れば、まさに教師みょうりに尽きるというものだ。

【日本教育新聞・掲載記事(1999・11・12)から】

京都、大阪での二十五年間にわたる小学校教員生活の中で、著者が実践してきた「絵綴り方」。子どもにとって最も身近な表現方法である「描く」「語る」の相互作用を生かしながら、思いをつづることを目指す。「生活綴り方教育」を絵画表現に広げたものといえる。

本書は、小学校低学年編と中・高学年編の二巻構成。いずれも子どもたちの素直な思いが込められた作品と、それを引き出す著者の指導のポイントを豊富に盛り込んだ。子どもたちが閉塞状況にある今、教師だけでなく保護者にとっても、示唆に満ちた力作だ。



著書 小学校低学年



著書 小学校中・高学年

情報発信コーナー

美術科教育の課題と授業研究部会 研究集会 2000 (プレ集会) 報告

新井哲夫 (群馬大学)

8月26日(土)の午前10時から午後3時の日程で、東京学芸大学附属竹早小学校を会場に、表記集会を開催した。本研究部会の活動は、年2回の会報発行と学会大会での部会交流に限られていたが、3月の部会交流で研究集会について協議され、今回はその最初の試みとして、「プレ集会」を開催したものである。

今回のテーマは、「教師の専門技術性の向上を考えると、個々の授業のもつ特殊性を十分考慮に入れつつ、一般化が可能な考え方や方法、技術等については可能なかぎりそれを明らかにしていく必要がある。」との認識に基づき、「美術科教育における授業研究 / 実践研究の課題と方法」とした。

午前の部では、春日明夫氏(東京造形大学)の司会により、新井が発表1「授業研究の課題と方法論の問題」を行った。新井は、稲垣忠彦、佐藤学らによる戦後授業研究の歴史的検

討をふまえて、戦後美術教育における授業研究の特色を分析し、「授業研究の対象領域を整理することが必要であること」「従来の美術科教育にみられる教材論を中心とした事例研究を整備しつつ、図工・美術の授業に関する一般的な原理や方法を客観的に明らかにする研究を充実させる必要があること」を指摘した。

午後の部では、新井の司会により、金子一夫氏(茨城大学)が発表2「授業研究の問題点」を行った。

氏は、発表の前半部分で、「教育実践研究」と「理論研究」「実践報告」「実践」「実験」との目的、性格の違いを整理し、現在の教育実践研究に見られる混乱はそうした基本的な違いが認識されていない点に原因があると指摘した。また後半部分では、学会誌等に掲載された授業研究の論文を分析した上で、授業研究は授業の原理や原則の一般体系の確立をめざすべきであり、その際必ず教育内容を考察の要素に入れるべきであると指摘した。

発表を受けた後の討議は、紙面の関係で割愛せざるを得ないが、今回のプレ集会を通じて、美術科教育における授業研究の現状や課題、方法について、参加者の間で一定の共通理解を形成できたと思う。今後、研究集会を重ねる中で、美術科教育における授業研究の改善、充実を模索したい。猛暑の中、当日の参加者は33名であった。

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

芭蕉

暑いじりじりとした夏。希望に燃え、日本各地、世界を駆け巡った方も多いことでしょう。その成果も発表されるであろう年度末の学会誌、筑波大会での口頭発表が、今から楽しみです。

そんな中、大阪教育大学の中堂元文氏は、病院のベッドで、この夏を過ごし復帰を目指して懸命に闘っていました。粘り強く何度かの壁を乗り越えられたのですが、残念ながら9月8日、逝去されました。享年43歳、あまりにも早すぎる別れでした。

氏は、公立及び附属中学での経験を活かし、

昨年度から大学で学生達に美術教育の楽しさや難しさを伝え始めていたところでした。経験に裏付けされた題材開発には独自のものが、今叫ばれている「実践と理論」の融合を図れる数少ない研究者のうちの一人

でした。また学会事務局のサポート・メンバーとして、会議録の作成にも尽力いただきました。

氏の無念さを想うと胸が痛みます

が、その思い描いた夢やロマンは我々の脳裏にしっかりと焼き付けられています。遺された者の務めとして、氏のスピリットを継承し、子どもたちに美術の持つ豊かさを伝える努力を続けようと念じています。合掌(宇田)

編集後記